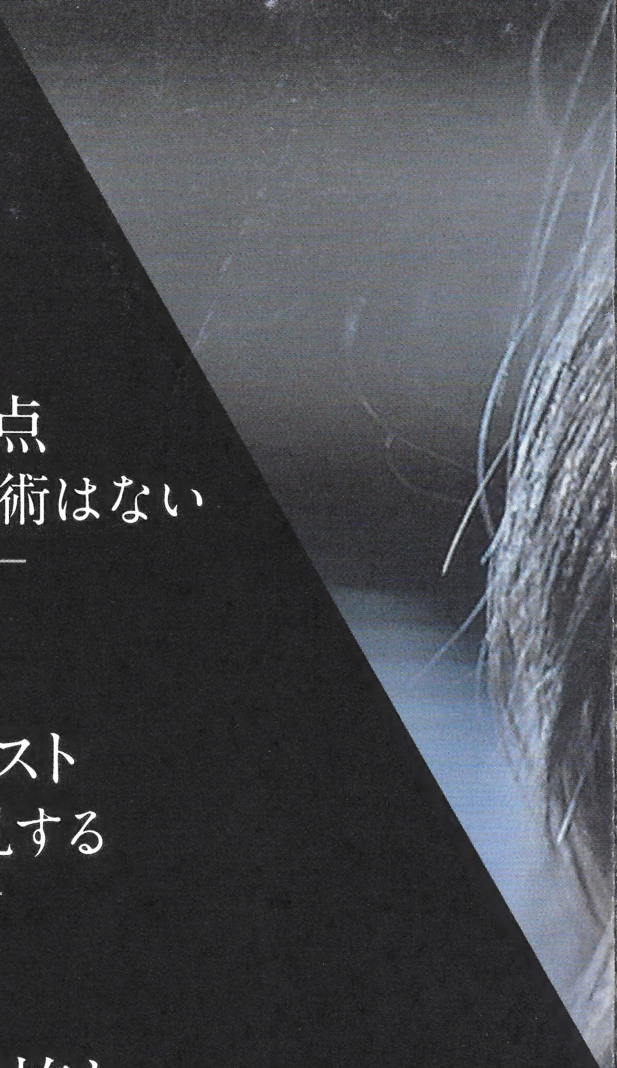


ヘレディタリー 継承

HEREDITARY

PG12



☆☆☆☆☆

現代ホラーの頂点
発狂しそうな恐怖　逃げる術はない

—— USA TODAY ——

☆☆☆☆☆

新世代のエクソシスト
ただし頭はさらに錯乱する

—— Time Out ——

☆☆☆☆☆

キューブリックの恐怖と
タガが外れた興奮がある

—— THRILLIST ——

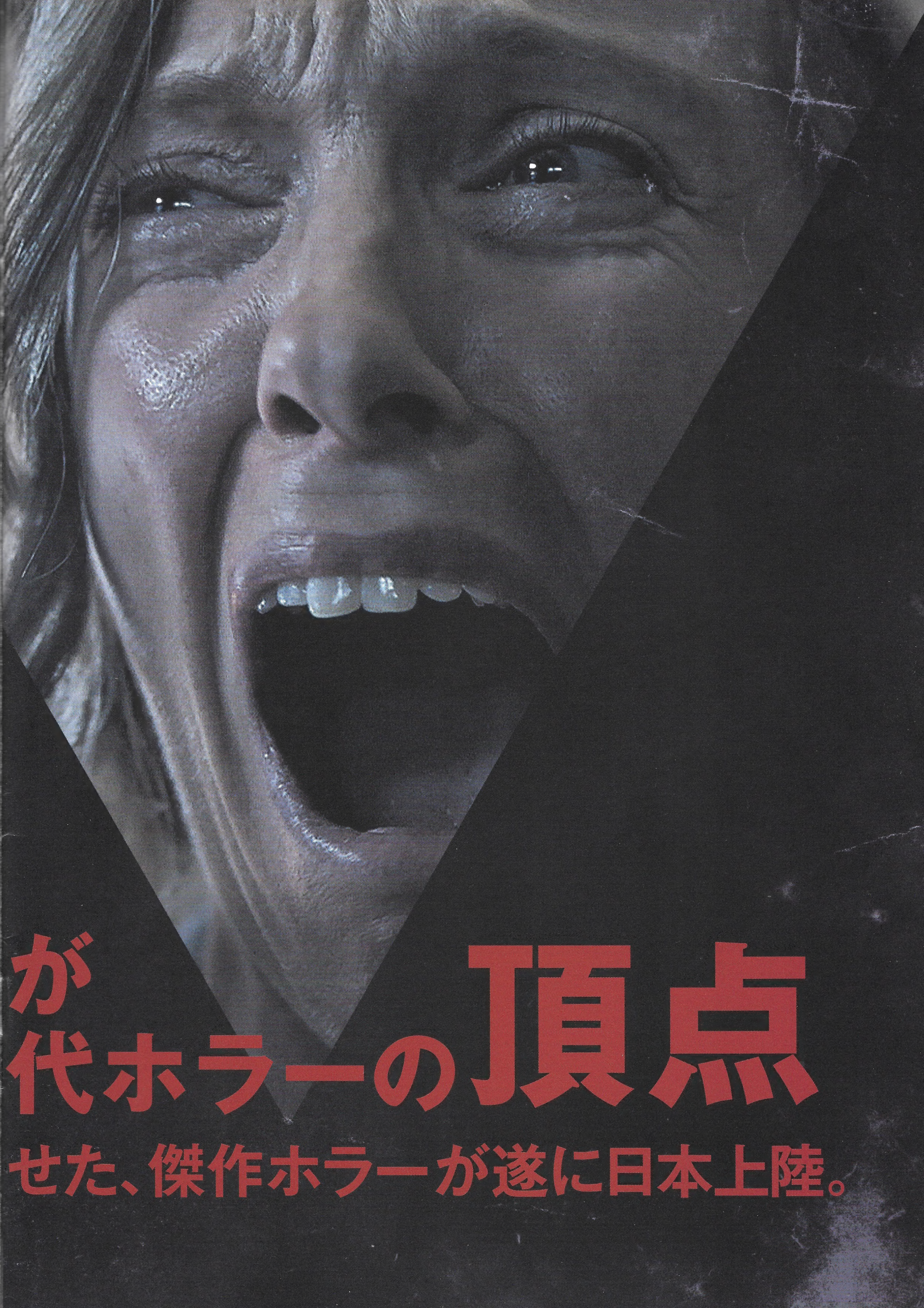
☆☆☆☆☆

ホラーの常識を覆した最高傑作

—— THE PLAYLIST ——

【超恐怖】これ
現

トラウマ級の怖さで全米を震撼さ


が
代ホラーの頂点
せた、傑作ホラーが遂に日本上陸。

全米を凍りつか

緻密に張り巡らされた恐怖

今年のサンダンス映画祭で「ホラーの常識を覆した最高傑作」「現代ホラーの頂点」と批評家から最高の評価を受け全米を震撼させたホラー映画がついに日本公開。家長エレンの死を発端に、遺された家族を死よりも残酷な運命と、想像を絶する恐怖が襲う。



…せた“完璧な悪夢”

…の罠。“フィナーレ”まで瞬きさえ許されない。

監督・脚本を務めたのは、本作が長編映画監督デビュー作となるアリ・アスター。スクリーンをよぎる光、真夜中に見る夢、家の壁に描かれた文字・・・天才的な発想と演出で、すべてのシーンがラストへの恐怖の伏線となる計算し尽くされた脚本と異常なまでの完成度は、ホラー映画の新たな到達点となった。

主演は『シックス・センス』のトニ・コレット。鬼気迫る怪演で来年のオスカー主演女優賞のノミネートが確実視されている。製作は昨年アカデミー賞作品賞に輝いた『ムーンライト』を生み、『レディ・バード』など次々に話題作を発表している最注目の映画スタジオ・A24。

STORY

祖母の死を発端に、死よりも残酷な運命と、想像を絶する恐怖が家族を襲う。

グラハム家の祖母・エレンが亡くなった。娘のアニーは、過去の出来事がきっかけで母に愛憎入り交じる感情を抱いていたが、家族とともに粛々と葬儀を行う。エレンの遺品が入った箱には、「私を憎まないで」というメモが挟んであった。

アニーと夫・スティーヴン、高校生の息子・ピーター、そして人付き合いが苦手な娘・チャーリーは家族を亡くした喪失感を乗り越えようとするが、奇妙な出来事がグラハム家に頻発。不思議な光が部屋を走る、誰かの話し声がする、暗闇に誰かの気配がする・・・。

やがて最悪な出来事が起こり、一家は修復不能なまでに崩壊。そして想像を絶する恐怖が彼女たちを襲う。一体なぜ？グラハム家に隠された秘密とは？

この家族の物語は、
あなたの永遠のトラウマになる。



CAST PROFILE

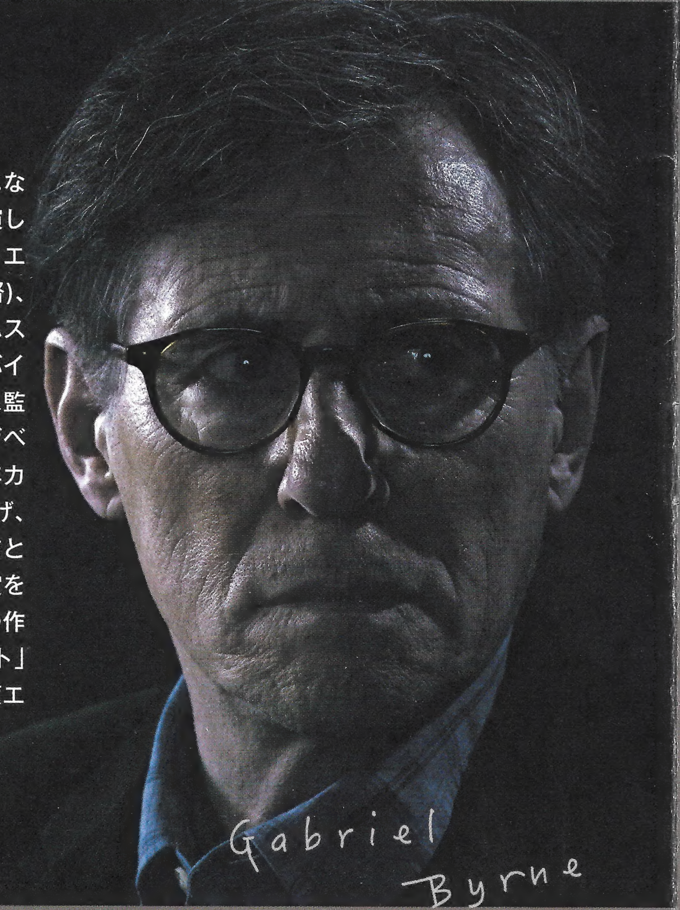


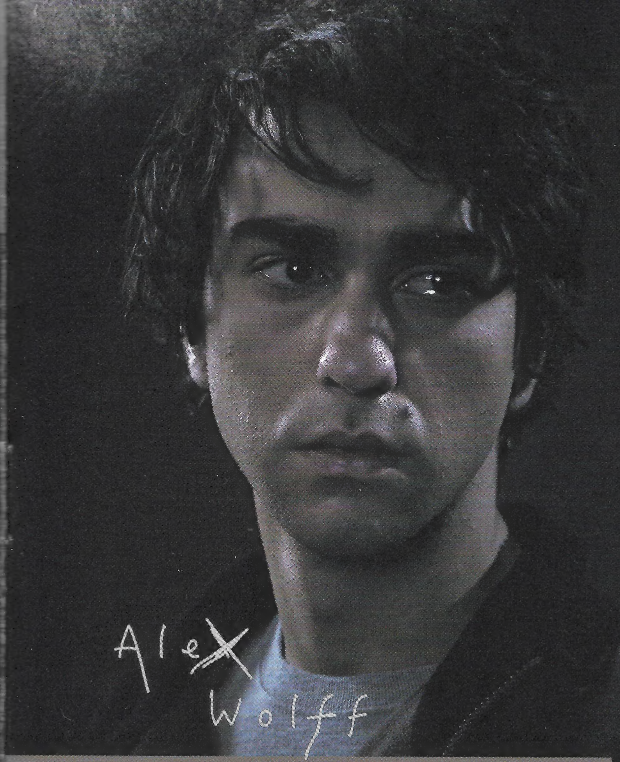
トニ・コレット(アニー・グラハム役)

1972年、オーストラリア・ニューサウスウェールズ州生まれ。オーストラリア国立演劇学院を卒業後、『ホワイト・プレジデント 敏腕経営コンサルタント』<未>(91/マーク・ジョフィ監督)で映画デビュー。『ミュリエルの結婚』(94/P・J・ホーガン監督)の主人公・ミュリエル役の見事な演技で世界中の映画ファンに強烈な印象を与え、ゴールデングローブ賞にノミネートされ、注目を浴びる。その後、『シックス・センス』(99/M・ナイト・シャマラン監督)でアカデミー賞助演女優賞候補になった。また、アカデミー賞作品賞候補となりスマッシュヒットしたヴァレリー・ファリス/ジョナサン・デイトン監督の『リトル・ミス・サンシャイン』(06)に出演し、ゴールデングローブ賞、BAFTA賞(英国アカデミー賞)の両賞の候補となり、全米映画俳優組合賞主演女優賞を受賞した。最近では、4シーズン目を迎えているTVシリーズ「ユナイテッド・ステイツ・オブ・タラ」(09-)で解離性同一性障害の主人公を演じ、ゴールデングローブ賞とエミー賞を受賞している。その他の出演作には、『ベルベット・ゴールドマイン』(98/トッド・ヘインズ監督)、『アバウト・ア・ボーイ』(02/ポール&クリス・ワイツ監督)、『めぐりあう時間たち』(02/スティーブン・ダルドリー監督)、『イン・ハー・シューズ』(05/カーティス・ハンソン監督)、『TSUNAMI　津波』(06/バハラット・ナルルーリ監督)、アニメ作品『メアリー&マックス』(08/アダム・エリオット監督)、『ヒッチコック』(12/サーシャ・ガヴァシ監督)、『おとなの恋には嘘がある』(13/ニコール・ホロフセナー監督)、『しあわせはどこにある』(14/ピーター・チェルソム監督)、『マイ・ベスト・フレンド』(15/キャサリン・ハードウィック監督)などがある。最新作は、ヴィン・ディーゼルと共演した『トリプルX:再起動』(17/D・J・カルーソー監督)、『アンロック/陰謀のコード』(17/マイケル・アプテッド監督)、『500ページの夢の束』(17/ベン・リューイン)、『マダムのおかしな晩餐会』(16/アマンダ・ステール監督)、『The Yellow Birds』<未>(17/アレクサンドル・ムーアズ監督)、『Fun Mom Dinner』<未>(17/アリシア・ジョーンズ監督)、Netflixオリジナル作品『Velvet Buzzsaw』(18/ダン・ギルロイ監督)など。

ガブリエル・バーン(スティーヴン・グラハム役)

1950年、アイルランド・ダブリン生まれ。教師をしながら俳優を志すようになり、29歳でジョン・ブアマン監督の『エクスカリバー』(81)で映画デビュー。出演している長編映画は60作品を超え、その中には『ミラーズ・クロッシング』(90/ジョエル・コーエン監督)、『ユージュアル・サスペクツ』(95/ブライアン・シンガー監督)、『白馬の伝説』(92/マイク・ニューウェル監督)、『若草物語』(94/ジリアン・アームストロング監督)、『デッドマン』(95/ジム・ジャームッシュ監督)、『エンド・オブ・バイオレンス』(97/ヴィム・ヴェンダース監督)、『仮面の男』(98/ランダル・ウォレス監督)、『チリ33人　希望の軌跡』(15/パトリシア・リゲン監督)などがある。イザベル・ユペールと共演した『母の残像』(15/ヨアキム・トリアー監督の)は、2015年カンヌ国際映画祭の正式出品作品に選ばれた。ブロードウェイへも活躍の場を広げ、ユージン・オニール作の『A Moon for the Misbegotten』でトニー賞候補となったほか、『A Touch of the Poet』ではアウター・クリティクス・サークル賞を受賞している。最近のブロードウェイ出演作には、『夜への長い旅路』があり、この作品で彼は再びトニー賞候補となった。また、HBOのドラマ「イン・トリートメント」(08)で扮したポール・ウェストン医師役にて、ゴールデングローブ賞を受賞、2度エミー賞候補となっている。





アレックス・ウォルフ（ピーター・グラハム役）

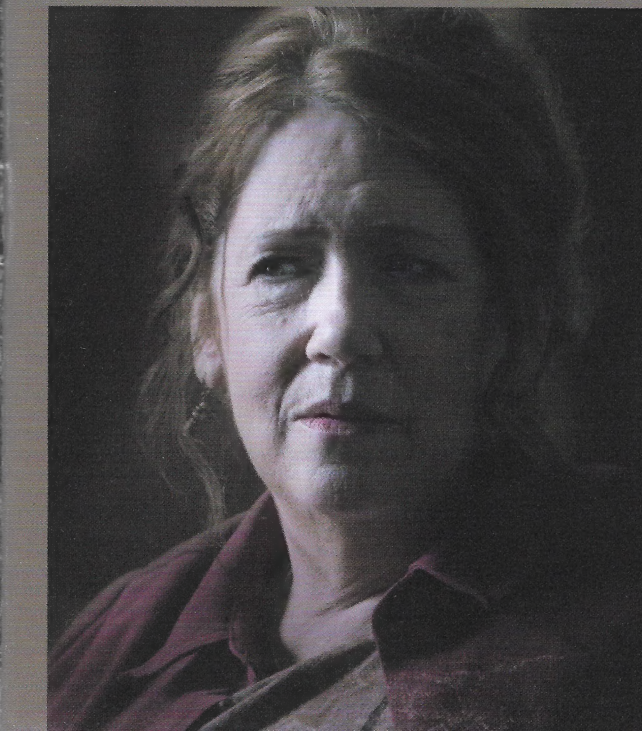
1997年、アメリカ・ニューヨーク州生まれ。ハリウッドで最も注目されている若手俳優のひとり。2016年には、ハリウッド・レポーター誌の"ネクストジェン・ライジング・スター・リスト"に選出されている。主な出演作品に、ブルックリン国際映画祭で最優秀主演男優賞を受賞した『ブレンダン・フレイザーの エリートをぶっとばせ！』<未>(13/ビリー・ケント監督)、『ライ麦畑で出会ったら』(15/ジェームズ・サドウィズ監督)、『パトリオット・デイ』(16/ピーター・バーグ監督)、Netflixオリジナル作品『エンド・オブ・スクール』(18/オリヴィア・ミルチ監督)などがある。また、スタジオジブリの長編アニメーション映画『コクリコ坂から』(11)の英語吹き替え版でヒロイン・松崎海の弟、陸を演じた。『ジュマンジ／ウェルカム・トゥ・ジャングル』(17/ジェイク・カスダン監督)では、ドウェイン・ジョンソンと共演し、話題を集めたほか、『The House of Tomorrow』(17/ピーター・リヴォルシー監督)での演技が、ハリウッド・レポーター誌で「思春期の自我の目覚めと大胆不敵さと傷つきやすさが絶妙に入り混じった演技とは思えない演技」と絶賛されている。今後の公開待機作に、実兄ナット・ウォルフと共演した『Stella's Last Weekend』<未>(18/ポリー・ドレイパー監督)など。

ミリー・シャピロ（チャーリー・グラハム役）

2002年、アメリカ合衆国フロリダ州タンパ生まれ。13年、ブロードウェイ・ミュージカル「マチルダ」ブロードウェイ公演にて主人公・マチルダ役を演じ、トニー賞を受賞したほか、グラミー賞の候補にもなった。その他の舞台出演作に、オフ・ブロードウェイ作品『You're A Good Man』のサリー役、ヨーク公劇場の『Charlie Brown』などがある。また、姉のアビゲイル・シャピロと、歌手として数多くのCDをリリースしている。本作『ヘレディタリー／継承』にて長編映画デビュー。女優、歌手としての活動以外にも、全国的な《NO BULLY（イジメ根絶）》キャンペーン活動を行っており、子供を勇気づけ守る運動に頻繁に参加している。

Milly
Shapiro





アン・ダウド（ジョーン役）

1956年、アメリカ合衆国マサチューセッツ州ホルヨーク生まれ。2012年に出演した『コンプライアンス 服従の心理』では、ナショナル・ボード・オブ・レビュー賞最優秀助演女優賞を受賞している。主な出演作に、『サイド・エフェクト』(13/スティーブン・ソダーバーグ監督)、『ヴィンセントが教えてくれたこと』(14/セオドア・メルフィ監督)、『素晴らしきかな、人生』(16/デヴィッド・フランケル監督)、『はじまりへの旅』(16/マット・ロス監督)など。また、テレビドラマへの出演作も多く、『ハンドメイズ・テイル／侍女の物語』(17)では、エミー賞（ドラマ部門）最優秀助演女優賞を受賞。今後の公開待機作に、『A Kid Like Jake』<未>(18/サイラス・ハワード監督)、『American Animals』(18/バート・レイトン監督)がある。

Ann
Dowd

DIRECTOR PROFILE



アリ・アスター（ 脚本・監督 ）

アメリカン・フィルム・インスティチュート（AFI）でMFA（美術修士号）を取得。『The Strange Thing About the Johnsons』<未>(11)、『Munchausen』<未>(13)、『Basically』<未>(14)など、いくつかの短編を脚本・監督。ニューヨーク映画祭、ファンタスティック・フェス、スラムダンス映画祭などで上映された。本作が長編映画デビュー作品である。

Pawel Pogorzelski

パヴェウ・ポゴジェルスキ（ 撮影監督 ）

2010年、アメリカン・フィルム・インスティチュート撮影監督プログラムにおいて、5つの学生賞と共に修士号を取得。その後、指導教官の１人であるロドリゴ・プリエト（AMC会員、ASC（全米撮影監督協会）会員）の下で、『恋人たちのパレード』(11/フランシス・ローレンス監督)の撮影に携わった。現在は、映画以外に、マクドナルドやアディダス、ホンダなど数多くのCM撮影も行っている。

Jennifer Lame

ジェニファー・レイム（ 編集 ）

『その土曜日、7時58分』(07/シドニー・ルメット監督)『ラブリーボーン』(09/ピーター・ジャクソン監督)などの見習いを経て、映画やテレビのアシスタント編集として様々な作品に携わる。その後、『フランシス・ハ』(12)、『ヤング・アダルト・ニューヨーク』(14)、『ミストレス・アメリカ』<未>(15)など数多くのノア・バームバック監督作品の編集を担当。また、『マンチェスター・バイ・ザ・シー』(16/ケネス・ロナーガン監督)において、ACEエディー賞、BAFTA（英国アカデミー）賞、インディペンデント・スピリット賞の各賞にノミネートされた。



Colin Stetson

コリン・ステットソン（ 音楽 ）

トム・ウェイツ、アーケイド・ファイア、ボン・イヴェール、TVオン・ザ・レディオなど名だたるアーティストとのコラボレーションで知られるアヴァンギャルドなサックス奏者。超絶技巧をマスターし、高く評価されている。SXSWなど世界の名だたる音楽フェスに出演を果たし、世界中からの人気を不動のものにしている。

スティーブ・ニューバーン（ ミニチュア模型・特殊メイク ）

今までに、『チーム★アメリカ／ワールドポリス』(04/トレイ・パーカー監督)、クリストファー・ノーラン監督の『インセプション』(10)、『ダークナイト・ライジング』(12)や『ザ・マミー 呪われた砂漠の王女』(17/アレックス・カーツマン監督)の視覚効果を担当。そのほか、『バイオハザードⅣ アフターライフ』(10/ポール・W・S・アンダーソン監督)、『パシフィック・リム』(13/ギレルモ・デル・トロ監督)の特殊効果、『スーサイド・スクワット』(16/デヴィッド・エアー監督)、ドラマシリーズ「スター・トレック：ディスカバリー」、「12モンキーズ」の特殊メイクなどを手がける。

Steve Newburn

アリ・アスター監督 インタビュー

Interview

Q. この映画は、監督自身の家族に起こった不幸が構想の元になっているそうですが、ホラー映画として完成させた経緯を教えて下さい。

「ホラー映画は、いろいろなテーマを表現できるジャンルだと思っています。ホラーはあらゆるテーマを活かすことができるのです。私は家族を失った不幸とトラウマについての映画を作りたかったのです。不幸がもたらす家族への巨大な影響について。不幸によって家族の絆が強まるという映画が近年は大半を占めており、それも嘘ではないと思いますが、不幸が起こりそこから立ち直れない人たちがいるのも真実です。私は後者についての映画を作りたいと思いました。そしてホラー・ジャンルにすることで、物語に悲惨さを加え、より多くの観客に観てもらえる可能性を得ることができます。何より、ホラーはカタルシスを必要とします。それがいかに恐ろしいものだったとしても、ホラー映画ではそれが喜びになりますから。」

Q. キャスティングについて教えてもらえますか？

「トニ・コレット、ガブリエル・バーンは偉大な俳優です。彼らにオファーをしない理由はありません。思った通り彼らの演技は素晴らしいものでした。ピーターとチャーリーのキャスティングは、オーディションを行いました。二人とも実際に会って演技してもらったのですが、演技力に圧倒されました。アレックス・ウォルフのオーディションでの演技は言い尽くしがたく、拒むことができない素晴らしさでした。ミリー・シャピロもオーディションに来てくれました。彼女に決めた時、本当にほっとしました。彼女はブロードウエイで経験を積み、10歳の時にトニー賞を獲った素晴らしい俳優ですから。」

Q. 今回撮影を行ったユタというロケーションについて教えて下さい。

「とても人里離れた場所でした。当初の脚本では、舞台は雪に閉ざされている設定だったのです。ところがスケジュールがずれてしまって、雪の中での撮影は実現しませんでした。グラハム家のセットはユタでなければ建てられないものではありませんが、ユタの景色は素晴らしかったし、クルーも優秀でした。撮影にかかる免税率が良かったのも、ユタにした理由の一つです。」

Q. 家族の関係が上手く描かれていますが、どのようにして取り組んだのでしょうか？

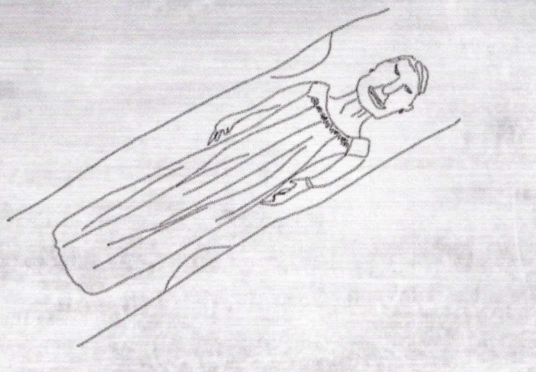
「自分の経験や、知り合いの経験、いろんな事を観察したし、勿論色々な映画からインスピレーションを得ようとしました。この映画は伝統的なスタイルに則っています。同時にそのスタイルを変形させ湾曲させようともしていますが、明らかに伝統的なスタイルに基づいていると言えます。映画の言語を使っているということですね。ただし、どの要素がどこに由来しているか、どうやって出てきたかという質問に全て答えるのは不可能に思えます。」

Q. ではそのあなたの言っている映画言語とは具体的には誰の映画言語でしょうか？

「私がこの映画を作っている時に意識していたのはマイク・リー監督やニコラス・ローグ監督です。映画で言えば『ローズマリーの赤ちゃん』、『エクソシスト』は大好きな作品ですが、本作を作るにあたって特に意識はしませんでした。それから『サイコ』についても沢山考えていました。この映画の開始30分で起こる事件は、『サイコ』のシャワールームでのシーンに似ています。あのシーンはその後の沢山の映画に活きています。『サイコ』は寝室のシーンなども、今に至るメロドラマの中で活きていたりします。」

Q. ホラーを作り続けたいですか、それとも前に書いた脚本のジャンルに戻りたいですか？

「現在プロダクションが進行しているのはホラーです。ホラーは好きですが、その後はしばらくはホラーから離れてみようかなと考えています」







ネタバレ記載がございます。
必ず本編鑑賞後にご覧くださいますよう
お願い申し上げます。



天才監督の長編映画デビュー

本作の脚本、監督を務めたアリ・アスターは、本作が長編映画デビュー作となる。この映画は、血筋を無理やり受けつがせようとする邪悪な力と闘う一家の物語で、これは呪いにも似た不運が長い間続いたアスター自身の家族の経験から生まれたものである。しかしその体験が、緻密で巨匠のような熟練の業を見せる天才監督を産み出した。アスターの繊細なテクニックと想像力で、この鮮烈なデビュー作は、1960年代や70年代の傑作ホラー映画に並ぶ評価を得た。

製作の前段階からアメリカン・フィルム・インスティチュートのクラスで一緒だった撮影監督のパヴェウ・ポゴジェルスキや才能あるアーティストたちから映画の美術デザインワークなどの助けを得ていたので、彼は本作の冒頭数秒で、その才能を世界に知らしめることができた。優美で流れるようなドリー・ショットによって、ふたつの別々の世界がつなぎ目がなく一体となって融合していく。ひとつはスティーブ・ニューバーン(『インセプション』(10)、『ダークナイト:ライジング』(12)などの特殊効果を手がけた)の手による緻密なミニチュアの世界、もうひとつはユタ・サウンドステージにスタッフが一から作った、グレアム家の住む人間の世界である。「この映画は何の打つ手も持たない人たちの物語です。」とアスターは語る。「グラハム家の人たちは、まるで外からの力で操られている不吉なドールハウスにいる人形のようなものです。」

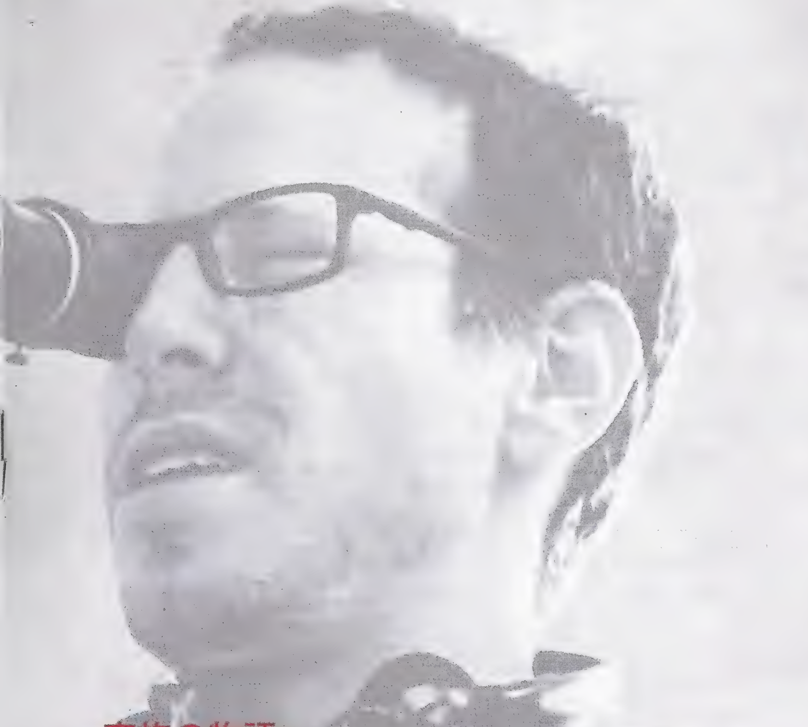
トニ・コレット、ガブリエル・バーン、アレックス・ウォルフ、ミリー・シャピロ、アン・ダウドといった豪華キャストに加え、アヴァンギャルドなサックス奏者のコリン・ステットソンの印象的な楽曲が流れる本作は、自身の時代を築き始めたアリ・アスターの衝撃のデビュー作である。

崩壊する家族

アスターは、自身の家族が3年以上にも及ぶ苦難に耐え抜いた後、本作の構想を練り始めた。「あまりにもひどい状態を経験したから、自分たちは元々呪われているんだという気持ちになりました。いつも私的な体験を元にして脚本を書いていますが、ジャンルに乗っ取った映画も好きです。自分や家族が味わった苦しみを、あからさまに映画にはしたくありませんでした。だから家族をテーマにした脚本を書き始めて、ホラー映画というフィルターを通して、その中に落とし込むことができたのです。ホラーというジャンルは、高いレベルのカタルシスが求められます。人生の不公平さを描く映画を作るのなら、ホラーというジャンルは、他のジャンルでは考えられないほど表現の余地があります。人生の不公平さというものが多かれ少なかれ讃えられ、それ以上に喜ばれるというおかしなジャンルですから。」

『普通の人々』(80)、『アイス・ストーム』(97)、『イン・ザ・ベッドルーム』(01)など数世代に渡る家族の死との格闘、精神障害、心理的虐待といった本作とは一見関連がなさそうなテーマを扱ったドラマからヒントを得たアスターは、本作を家族の悲劇の物語からホラーのジャンルへと押し上げた。彼はこういった感情に訴えるドラマと、『ローズマリーの赤ちゃん』(68)、『赤い影』(73)、『回転』(61)といった60年代や70年代の次第に恐怖が膨れ上がる映画を創造的発想力で融合させた。「当時は、キャラクターが魅力的で、洗練された映画が流行しました」とアスターは語る。彼は脚本を書き始め、身の毛もよだつような出来事が続き、それが壮大な策略の一部であったことが明らかになるという、文字通り呪われた一家の物語を具現化させた。

ストーリーが進むうちに、継承や家系というテーマが現れ、それがホラーになっていくため、映画のタイトルが次第に不気味さを増していく。「これは家族がテーマの映画です。自分の家族はどんなもので、何を受け継いでいるかなんて、自分では選ぶことはできません。」とアスターは語る。「自分が関与できない状況の中から生まれる恐怖について描いています。自分には何もできないと気づくことほど、気が動転することはないと思います。グラハム家の人間は何の力も持っていないということが決定的な点です。最後には希望が持てず、全てが虚しく思えるのです。」とアスターは語る。「それでいて、観客に最後まで危機感を与えると同時に、感情移入することができて且つ、スケールの大きなホラー映画を作りたかったのです。僕の希望は、観客を長時間座らせることができて、心の奥にある根本的なものを揺らして、逃れることはできないのだと思わせる映画を作ることです。」



死よりも恐ろしい運命

本作のオープニングで、グラハム家は悲しみに打ちひしがれたごく普通のアメリカ人の一家に見える。しかし、アニーの母親であり、一家の謎めいた女家長であるエレン・リーの喪失を受け、グラハム家の人々はその死を乗り越えようとする。そして、アニーは肉親を亡くした人を支援するグループの会に参加したことで、亡き母親の人生や"残したもの"について詳しく知るようになる。また、家族の中でアニーが疎外感を感じていたことも明かされていく…。



「アニーは母親のことで多くの問題を抱えていたのですが、その根底の部分を突き止めることはできなかったのです。」とアスターは語る。「アニーは、エレンが生前、何をしていたのか知りませんでした。母親が何をしているか知ろうとは思わなかったというのが、その主な理由です。本能的に"何か"に気づいてはいましたが、彼女はそれを無視しました。もし直視したら、自分が壊れてしまいそうだったからです。」

差し迫った自身の作品の展示会を控え、自宅で作品を作っているアーティストのアニーは、自分の人生をアートで表現することで内なる不安を紛らわせていた。その作品であるミニチュアとドールハウスは、エレンが死ぬ前のホスピスケアを含む現実のグラハム家の試練や苦悩を表している。「彼女は現実の場所や自分が置かれた状況を完璧な小さなレプリカとしてミニチュアで作っています。それによって自分の人生や経験、そして記憶をコントロールしているような気分になっていたのです。でもそれは幻想でした。」とアスターは語る。

アニーの夫・スティーヴン(ガブリエル・バーン)は穏やかな人間だ。自身が経営する郊外の精神療法施設で、長時間、クライアントを診て過ごしている。息子のピーター(アレックス・ウォルフ)は目標を見失っている高校生。ギリシャ古典の授業の議論では口ごもり、授業の合間には友人たちと隠れてマリファナを吸っている。「ピーターは人生の方向性を見失っています。特に興味を示すものはなく、しっかりしたアイデンティティも築けていません。やがて陰鬱な運命が彼を襲い、最後には本当の目的が授けられます。」とアスターは語る。

娘のチャーリーは特別支援クラスの生徒。一家のツリーハウスにこもりっきりで、動物の死骸や細々した日用品で、静かに不気味なトーテム像を作っている。チャーリーは心に深い傷を負っており、物静かで、対人恐怖症を患っている。しかし、彼女には、それだけが原因ではない暗いものがある。次第に状況が明らかになっていくと、グラハム家の人々が、物語の外にある何らかの力に操られているような感じがしてくる。

家族の物語

アスターの短編作品やクラシック映画を思わせる雰囲気を持つサイコドラマは、各映画祭やインターネットで高い評価を受けた。サイレント映画『Munchausen』(短編・13)では、ボニー・ベデリア扮する母親が、大学進学を目指し、大人へと成長する息子の振る舞いに干渉して、悩み、自責の念にかられるというもの。またネットで拡散される前にニューヨーク映画祭で上映され大評判となった『The Strange Thing About the Johnsons』(短編・11)では、一転して1950年代風のホームドラマで、大人になった息子の老いた父親に対する性的虐待を描いたゾッとするような話を描いている。



両作品ともに、家族のしきたりや伝統をテーマに毒を混ぜることで、馴染みのある題材でありながら、ブラックコメディや抑えのきかない恐怖を産み出している。共に見事なプロットであり、その完成度は、テンポ、構成、視覚的表現のどれもが計算しつくされており、生まれながらの映画監督ともいうべき仕事ぶりである。本作同様に彼の作品は、独自の予想がつかない方法で、家族間の力関係をあぶり出している。「常々、私は力関係の揺れに興味があったのです。家族と過ごしている時ほど、陰湿で気を使うことはありません」とアスターは語る。意外にもアスターはマイク・リー監督の作品にヒントを得たという。「マイク・リーは生き生きとしたキャラクターや関係性を産み出しています。他の監督のアプローチでは見られないような、登場人物たちの人生を感じることができるのです。僕はスタッフに彼の『人生は、時々晴れ』(02)を見せ、台本にも入れ込みました。」

本物の悪夢

グラハム家の人々の紹介が終わると、物語はじりじりと薄気味悪い方向にシフトする。アニーは郊外に住む主婦のジョーン(アン・ダウド)と知り合いになり、最近、近親者を亡くした悲しみを打ち明けられる。アニーはジョーンから、降霊の場に参加するよう説得され、これが物語の後半の恐怖へとつながっていく。しかしアスターは、しばしば彼の作品がこれまでも予想を覆してきたように、本作品でも長くひとつのジャンルにとどまることはない。綿密に作り込まれたプロットが織りなすシーンには、常識を超えた恐怖と驚きが盛り込まれており、とどまることない意表を突く展開となっていく。

「シャワーを浴びるジャネット・リーを僕の解釈で描きたかったんです。」とアスターは『サイコ』(60)を引き合いに出して物語を語る。後半の緊張感と恐怖について言えば、本作は誰もが予想しなかった展開となる。アスターが自身のデビュー作で描いた家族の混乱は、初期の『Munchausen』(短編・13) や『The Strange Thing About the Johnsons』(短編・11)で描いた家族内での不安やごまかしをテーマにするという流れで続いており、家族にまつわるホラーを描いた悪夢として仕上げたのだ。

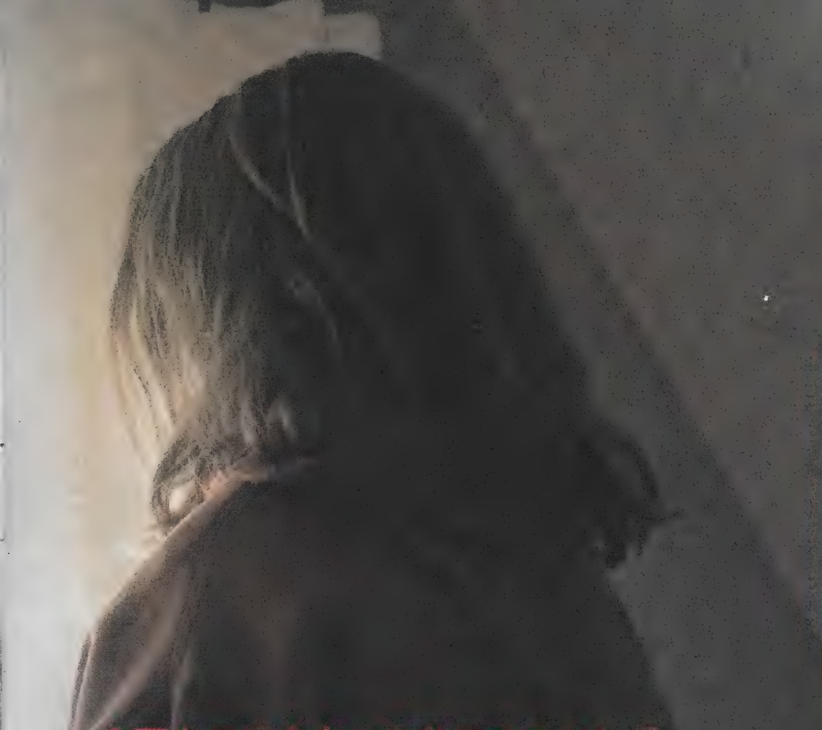
恐怖は細部に宿る

『ヘレディタリー／継承』は2017年に制作が始まったが、それ以前にすでに、アスターは脚本を書く前のキャラクターの詳細な設定や背景を組み立てるのに7年の歳月を掛けていた。また彼は資金面の確保、ロケ地決定のほかにも、撮影が行われる前に、彼独自のヴィジョンを実現するため75ページにも及ぶショットリストのアウトラインをデザインしていた。アスターはプロデューサーたちから正式な了承が出る数年前から、自らのヴィジョンに命を吹き込むことに情熱を燃やして、可能性のある協力者とコンタクトを取り始めたという。彼は有名なサックス奏者で作曲家のコリン・ステットソン(アーケイド・ファイア 、ボン・イヴェール 、トム・ウェイツ、TV・オン・ザ・レディオなどとのコラボレーションで知られる)と連絡を取り、制作が始まる2年前に作曲を依頼していたのだ。アスターは映画のキーとなるスタッフと、撮影の始まる数ヵ月あるいは数年前から仕事をし、自身のすばらしいヴィジョンを作り上げる手伝いをしてくれる協力者とのネットワークを築き始めた。いつ、どのようにして映画が作られるという何の保証もないうえ、ほとんど無名で初めて監督する映画監督であるのにもかかわらず、早い段階から多くの才能あるアーティストたちに、自身のプロジェクトへの参加を納得させたのだった。



プリプロダクションの間に、アスターはトロントを拠点にする視覚効果のスペシャリストで、彼が感銘を受けた『チーム★アメリカ／ワールドポリス』(04)のミニチュア制作を担当したスティーブ・ニューバーンに連絡を取った。ニューバーンの専門はメイクアップと特殊メイクで、最近では『スーサイド・スクワッド』(16)や現在4シーズン目を迎えているTVシリーズ「12モンキーズ」(15-)を担当している。本作では、アニー・グラハムの複雑な装飾やコンテンツを含むミニチュア模型制作のデザインに加え、物語のいくつかのポイントとなるシーンで重要な役割となる特殊メイクアップと特殊メイクを施したミニチュア人形の制作も手掛けた。

映画全体を通して実物大のレプリカと符合するミニチュア模型をニューバーンが作る前に、アスターとプロダクション・デザイナーのグレイス・ユン(『Beach Rats』<未>(17)、『First Reformed』<未>(17))は、職人気質を感じられる濃い色の木造3階建てのグラハム家の設計図とインテリアのデザインに取り掛かった。これは家の住人同様に、映画のキャラクターの"1人"なのだ。アスターは、グラハム家が不吉な予感がしすぎないようにしたことを強調する。「呪いの館のような陳腐なものは避けたかったのです。きしむ床や風雨にさらされた壁、ゴシック風の建物ではダメだと思っていました。何とか本物の家を探そうとしたんです。しかし、すでに綿密に計画されていたカット割りがあったので、元々ある建物でロケを行うことは不可能でした。」とアスターは語る。パーク・シティ・スタジオの中には、主要な部屋や廊下、そして本編の壮絶なクライマックスの舞台となるツリーハウスまで、寸分違わないグラハム家が制作された。スタジオ内での撮影は大変だった一方で、アスターが自分のヴィジョンを実行するには処理しやすいスケールで臨機応変な対応が可能だった。「デザインしたプラン通りの撮影をするためには、広いスペースが必要でした。廊下も各部屋も広かったので、ドリー・ショットもでき、ドアを通り抜けることも可能になりました。すでにある建物でのロケ撮影のように制限されることなく、完全に撮影をコントロールしたかったのです。」とアスターは振り返った。





主要キャラクターのキャスティング

本作で真っ先にキャスティングされたのは主演のアニー・グラハム役で、アカデミー賞候補となり、エミー賞を受賞したトニ・コレットだった。彼女は『ミュリエルの結婚』(94)やTVシリーズ「ユナイテッド・ステイツ・オブ・タラ」(09-)などの主演を務め、世界中で有名な女優である。その後、性格俳優として知られるアン・ダウド(『はじまりへの旅』(16)、TVシリーズ「LEFTOVERS／残された世界」(14-)が、おしゃべりで超自然現象に傾倒するジョーン役への起用が決まった。彼女は、Huluドラマ「ハンドメイズ・テイル／侍女の物語」(17-)の冷淡で残酷な叔母のリディア役でエミー賞を受賞する数週間前に、本作の仕事を終えた。

アスターとキャスティング・ディレクターのジェシカ・ケリー(『ジャッキー／ファーストレディ 最後の使命』(16))は、ピーターとチャーリー・グラハム兄妹を含む数人の若いキャラクター役のオーディションをニューヨークで行った。若手のホープのアレックス・ウォルフ(『パトリオット・デイ』(16)、『ジュマンジ／ウェルカム・トゥ・ジャングル』(17))がピーター役のオーディションを受けると、その熱意とやる気が高く評価され、すぐに採用が決まった。ブロードウェイのオリジナル・キャスト版『マチルダ』の主演で10歳の時にトニー賞を受賞したミリー・シャピロは、困難な役柄への並々ならぬ献身性が評価され、その勇気がキャスティング・チームを魅了した。

最後にキャスティングされたのが、ガブリエル・バーン(『ユージュアル・サスペクツ』(95)、『ミラーズ・クロッシング』(90))である。彼はゴールデングローブ賞を受賞し、HBOのドラマ「イン・トリートメント」(08)のポール・ウェストン医師役でエミー賞候補に2度なったことがあり、今回の心理療法医のスティーヴン・グラハム役にはうってつけだった。「15歳の時に『ミラーズ・クロッシング』を数え切れないほど見ていたので、ガブリエルと仕事ができたのは、すごくシュールな感じだった。知られているかは分からないけど、彼は大の映画ファンだ。撮影の合間、彼とパウエル＆プレスバーガー作品やポーランド映画なんかの話をしていたんだ」とアスターは語る。



心を掻き乱す音楽

本作の緊張感を増幅させているのが、コリン・ステットソンの音楽である。彼はアーケイド・ファイア、ボン・イヴェール、TVオン・ザ・レディオ、トム・ウェイツなどとレコーディングやツアーを行ったことがあるサックス奏者であり、またアヴァンギャルドな作曲家でもある。今までにいくつかの長編映画に楽曲の提供や音楽担当をしており、コリン・ステットソンの曲は、『それでも夜は明ける』(13)、『君と歩く世界』(12)、『奪還者』(13)などに使用されている。脚本の推敲中、彼の音楽を自らを鼓舞するために使っていたアスターは、企画の早い段階でコリンに連絡を取り、本作の危険で広がりのある、それでいて複雑なサックスを駆使した音楽を作るミュージシャン兼作曲家として参加するよう説得したという。

「コリンのサックスは、低くて不気味な感じがします。彼は単なるサックス奏者ではありません。循環呼吸や重音奏法、またパーカッションのようなバルブ奏法などのあらゆる特殊奏法をマスターしています。この脚本の執筆中、彼のソロアルバムの「New History Warfare 2」と「3」を聴いていました。私にとって彼の音楽は、この映画と密接に結びついているのです。」とアスターは振り返る。

E s s a y

宇野維正（映画・音楽ジャーナリスト）

突然変異の正統派ホラーの傑作、「へ

オープニングから呆気にとられるような映像トリックが仕掛けられ、物語の中盤ではこれがスクリーンの中のフィクションであることをわかってはいながらも目を疑うような出来事が起こり、終局に向かって加速度的に常軌を逸した展開が畳みかけてくる。127分の上映時間中、全身からずっと嫌な汗が出続けた後、まず頭の中を埋め尽くしたのは「一体このアリ・アスターって監督は何者だ？」という謎だった。

2012年に設立されて以来、たった6年で作品の質、量ともに目覚ましい発展を遂げている独立系映画製作&配給会社A24の作品であるということ。そのA24作品で過去最高のオープニング成績を記録した大ヒット作であること。そんな前情報から、A24製作・配給のホラー作品の多くがそうであるように「きっと、何か新しい趣向の凝らされた、あるいは社会性の強いテーマを扱った、今風のホラーなんだろうな」くらいの心構え（つまり、十分に大きな期待をしていたわけだが）で本作を初体験したのだが、とんでもなかった。『ヘレディタリー／継承』はホラー映画の正史に刻まれる正真正銘のクラシックで、長編初監督・脚本作品でいきなりこんな傑作を作り上げてしまったアリ・アスターは、少なくとも2018年に商業デビューした映画作家の中で最も重要な映画作家だろう。

『ヘレディタリー』の本国公開時点でまだ31歳のアリ・アスター。彼が最初に注目されたのは、7年前の2011年、初の短編『The Strange Thing About the Johnsons』がネットにリークされた時だった。詩人として世間に名を知られた父親と、その妻と息子。そんなある黒人家庭の14年前と現在を描いた約30分の同作のストーリーは、ネタバレうんぬんではなく（その家族の秘密自体は最初の数分で明らかになる）、ほぼすべての人にとってあまりにも不快な内容のため、ここで文字にするのも躊躇われる内容なのだが、「ヤバい作品」という噂が噂を呼んで、ネット上で大いにバズることとなった。2013年に発表された約16分の短編「Munchausen」はなんとサイレント映画。大学入学を控えた息子と母のいびつな関係を描いたこの作品のタイトルは、精神疾患の一種として知られる代理ミュンヒハウゼン症候群に由来している。



レディタリー／継承』が生まれた理由

それら初期監督作品からわかるのは三つのことだ。一つめは、この映画作家は、観客の神経を逆撫でするようなタブーを描くことに全精力を注いできたということ。二つめは、そのタブーは父と子の関係であったり、母と子の関係であったりと、常に家族の中で起こる出来事であること。そこには、かなり強固で根深いオブセッションのようなものが見受けられる。三つめは、20代半ばでサイレント映画に挑戦してみせたことからもわかるように、ごく初期の段階から非常に端正な映画的技法を身につけていたこと。それらの作家的特性は、本作『ヘレディタリー』にも完全に受け継がれている。

アルフレッド・ヒッチコックの『サイコ』（1960年）、ロマン・ポランスキーの『ローズマリーの赤ちゃん』（1968年）、ウィリアム・フリードキンの『エクソシスト』（1973年）、リチャード・ドナーの『オーメン』（1978年）。思えば、ホラー映画のクラシックとされる作品の多くは、いずれも家族の中で起こった忌々しい、あるいは禍々しい出来事を描いた作品だった。また、『サイコ』を除く上記3作は、宗教的題材を描いた作品でもあった。それは、キリスト教社会である西欧における最大のタブーが──少なくとも当時は──キリスト教的「悪魔」や邪教や秘教の描写であったことにも起因しているのだろう。

鍵となるのは「家族」と「宗教」。それをふまえると、本作『ヘレディタリー』がまるで突然変異のようにそうしたホラー・クラシックの歴史の最も新しい1ページに書き加えられたことにも納得がいく。インタビューでアリ・アスターはホラー映画を次のように定義している。「ホラー映画には二通りの作品がある。一つはまるでジェットコースターのように次から次へと登場人物に恐怖が襲いかかってくる作品。観客は映画を楽しんで、家に帰れば忘れてしまう。もう一つは、より本質的な恐怖を観客に与え、深刻なレベルで観客の人生にも影響を及ぼそうとしている作品。自分が観たいと思うのも、そして作りたいと思うのも、後者だ」（THE VERGE,Jun 7, 2018）。

本作『ヘレディタリー』の大成功を受けて、現在アリ・アスターは同じA24で新作『Midsommar』の制作に入っている。『ヘレディタリー』に続いて同作もホラー映画になるとのことだが、彼は必ずしもジャンルに縛られた監督になるつもりはないと主張しながらも、こうも言っている。「いつか映画にしたいと思って書いた脚本がまだ10本ある。それらはいずれも異なるジャンルの作品だ。でも、すべてに共通しているのはダークサイドに属する作品であるということだ」。



『ヘレディタリー／継承』完全解析

ネタバレ記載がございます。
必ず本編鑑賞後にご覧くださいますようお願い申し上げます。

小林真里（映画評論家 / 映画監督）

「タイトルが持つ意味」

あまり馴染みのない「Hereditary」という言葉だが、「遺伝的な」「先祖代々の」「世襲の（親譲りの）」という意味がある。劇中で語られる、一家の遺伝的な「病」を指しているようで（アニーの父は妄想性のうつ病で、兄のチャールズは統合失調症だった）、それ以上に、本作の諸悪の根源である悪魔（ペイモン）崇拝者、王妃（クイーン）リーの「血筋」という意味である。リーが崇拝するペイモンが求めるのは、クイーン・リーの「血筋」の男性であることが劇中明らかになる。そのため、リーの血を継承したグラハム家の長男ピーターが狙われるのだ。

「ペイモンとチャーリー」

監督アスターのVarietyのインタビューによると「チャーリーが生まれたときから、ペイモンは彼女の中に存在した」という。劇中、トニ・コレット演じるアニーがチャーリーに話す「あなたは赤ちゃんの時も泣かなかった。生まれたときでさえ」という発言がこれを裏付けている。だが、チャーリーは男性じゃないためペイモンが肉体に宿ることはできない。そのため彼女は用済みとなり、命を落とす。劇中、悪魔的でアウトサイダーなチャーリーの行動として、鳥の死体をハサミで首チョンパするシーンがある。これはミヒャエル・ハネケ監督『白いリボン』の同様のシーンを彷彿とさせられるが、本作の監督アリ・アスターはハネケのファンであることを公言している。

「チャーリーが鳴らすクリッカー音」

チャーリーのクセの一つである、口の中で舌を使って「コッ」と音を鳴らすクリッカー音（クリッキング・ノイズ）。この映画の印象的な音のトリック、音の恐怖を生み出しているのが、効果的に使用されているこのサウンドだ。これはペイモンが中に潜むチャーリーの「普通じゃない」特徴を表しており、映画の終盤でピーターがこの音を鳴らす時、ペイモンの支配が始まっていることを示唆している。

「なぜ父親ではいけないのか？」

ペイモンのホスト（宿主）は男性でいいなら、ガブリエル・バーン演じるセラピストの父親スティーブではダメなのか？　と思うかもしれないが、スティーブはエレンの娘婿であり、「血筋」ではないため、この役目は務まらないということだろう。エレンは過去に、ペイモンを召喚するため自分の血を引くアニーの兄チャールズを利用しようとしたが、失敗した。彼は母エレンの自室で16歳のときに首吊り自殺をしたのだ。「母さんは僕の中になにかを招き入れようとした」という遺書を残し。

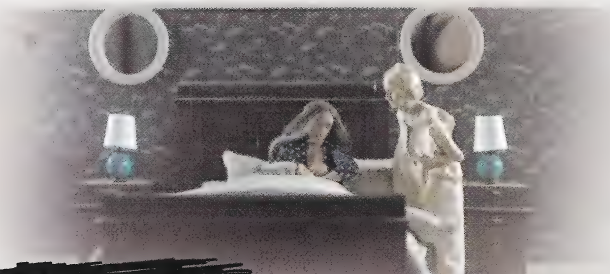
「チャーリーの事故」

病院に急ぐ車の窓から顔を出し、電柱にぶつかって悲惨な最期を迎えるチャーリー。あれは本当に事故だったのか？　答えは「ノー」。あの事故は、ペイモンを解放するためにペイモンを崇拝する信者がかけた呪いだったのだ。気がついただろうか？チャーリーが衝突する電柱には、実はペイモンの紋章が刻印されていたのだ。後に、リーもアニーも首を切られたことから、グラハム家の女性は全員首を切られなくてはいけない運命だったのである。ペイモンに差し出すために。



「ペイモン」

ペイモンは『ヘレディタリー』のために創作された架空のオリジナル・キャラクターではなく、1700年代のヨーロッパの伝承に登場する悪魔。魔術書「レメゲトン（Lesser Key of Solomon）」や、ヨハン・ヴァイヤーの「悪魔の偽王国（Pseudomonarchia Daemonum」などに登場する。地獄の階層ランクでは高位に位置し、王や公爵の地位にあたる。この世に現れるときは王冠をかぶって登場するという。このゴージャスなイメージも、エレンたち信者がペイモンを崇拝する理由の一つだろう。

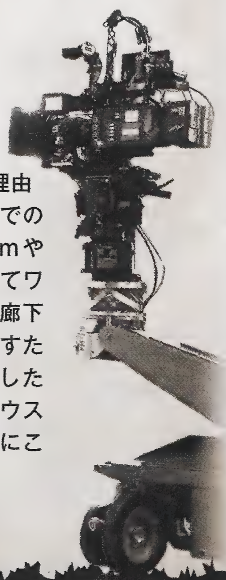


「ミニチュア」

グラハム家の面々と同じく本作の重要なキャラクターといえる、「ミニチュア」と「家」。アニーはジオラマ・アーティストで、グラハム一家の日常や自身のトラウマ的な出来事を基にした精巧なミニチュア制作を行なっている（終末医療や幼稚園など）。これらの作品には彼女の繊細な精神状態も反映されており、エレンの死後、その作品は次第にダークな色合いを帯びてくる。チャーリーの事故現場を再現した作品が顕著な例だ。また、このミニチュアは、ミニチュアの家の中の家族のように、グラハム一家が外部の力によって、ジョーンらカルトに糸を引いて操られていることのメタファーだと解釈できる。

「家」

映画の主要な舞台となる一家が住む家と、家の内部（一階、二階、屋根裏部屋など）、庭のツリーハウスは撮影のため一から作り上げたという。その理由は、Bloody Disgusting.comのインタビューでの監督の発言によると「そうすることで、10mmや15mmのレンズを使わなくても、自在に壁を外してワイド・ショットが撮れるから。もう一つの理由は、廊下や戸口を広くしてドリー（カメラ用の台車）を動かすため。できる限り（連続した）ショットを長く撮影したかった」からだという。アスター監督は「ドールハウスのような美を追求するため」家の映像にも徹底的にこだわったのだ。



「裸の人々」

ラストの不気味な裸の信者の皆さんの姿を見て「うわ、『イット・フォローズ』みたい」と思った人もいるだろうが、生まれたままの姿（英語でBirthday Suit）はオカルト的見地からも最高のスタイル。衣服は魔法的なエネルギーの流れを体に通す時に妨げになると信じられている。ペイモンに対面するときの正装がまさに「裸」ということなのだろう。

「チャーリーの部屋の壁に書かれた不気味な文字」

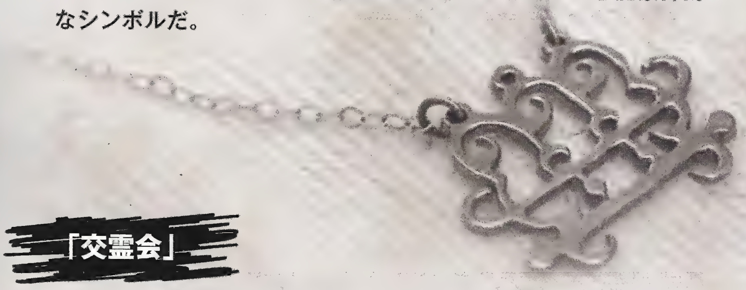
ペイモンをこの世に召喚するために、おそらくリーが書いた魔法の呪文。サイトSignal Horizonの調査によると「サトニー（Satony）」は「死者とコミュニケーションを取るために使われた言葉」で、「ザサス（Zasas）」は著名なイギリス人オカルティスト、アレイスター・クロウリーが悪魔コロンゾン（Choronzon）を呼び出すときに使用した言葉。「Liftoach Pandemonium」は、古代ヘブライ語の「開く」という意味の言葉「Liftoach」と、ルシファーがいる悪魔の巣窟や地獄を意味する「Pandemonium」を組み合わせた言葉。

「ミステリアスな光」

リーの葬儀中の教会や、チャーリーの校内などいたるところで目にする謎の光。劇中、この光の謎が説明されることはないが、これはペイモンとグラハム一家を結ぶ、ペイモンが発するエネルギー（のようなもの）だと推測できる。

「ネックレスの紋章」

これはもちろん、ペイモンの紋章。オカルトを徹底的に研究したというアスター監督は、わかりやすい明確なシンボルを避けるために「ペンタグラム（五芒星）や逆さ十字架ではない象徴学とはなにか？」を考えたという。その結果採用されたのが、この悪魔崇拝的なシンボルだ。

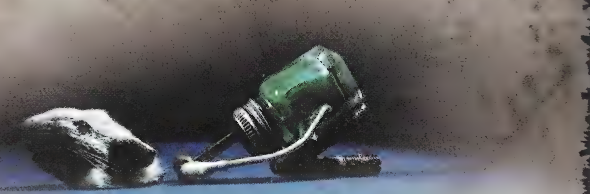


「交霊会」

ジョーンの家で見せられた交霊会を体験し、死んだチャーリーに会えると信じたアニーは、自宅で深夜に交霊会を行う。スティーブとピーター同席で。しかしこれはジョーンの罠で、この一家の交霊会でチャーリーの肉体から解放されたペイモンをまんまと召喚してしまう。

「ピーターの死、ペイモンの降臨」

学校の校庭で一人でランチをしているピーター。すると道の向こう側からジョーンが叫んでいる。「お前に呪文をかける。肉体から出ていけ！」。その後、授業中に突然机に激しく頭を打ちつけ畏怖するピーターは、徐々に正気と魂を失っていく。そしてラスト、別人へと豹変した母親を見て自宅の窓から飛び降りたピーターの体から黒い魂が抜け出し、謎の光が体内に入っていく。これがペイモンの魂だろう。



「ひれ伏す二つの首なし死体」

一つは何者か（もちろんペイモン信者だ）に掘り起こされ、墓地から運び出されたエレンの死体。もう一つは、屋根裏部屋の扉に頭を繰り返し打ちつけた後、自ら糸でギーコギーコと首を切り落としたアニーの死体だ。

「なぜ生後からピーターに狙いを定めなかったのか？」

アニーが語るように、ピーターが生まれた頃、エレンがみんなを操ろうとするので不干渉ルールを決め息子を母に近づけないようにしていた。そのためエレンは手を出せなかったというのが真相。その後、アニーはチャーリーが生まれたあと彼女をエレンに差し出したが、チャーリーが述懐するように、エレンはチャーリーに「男の子になって欲しい」と本人に告げていた。

「実は一番怖いのはアニー？」



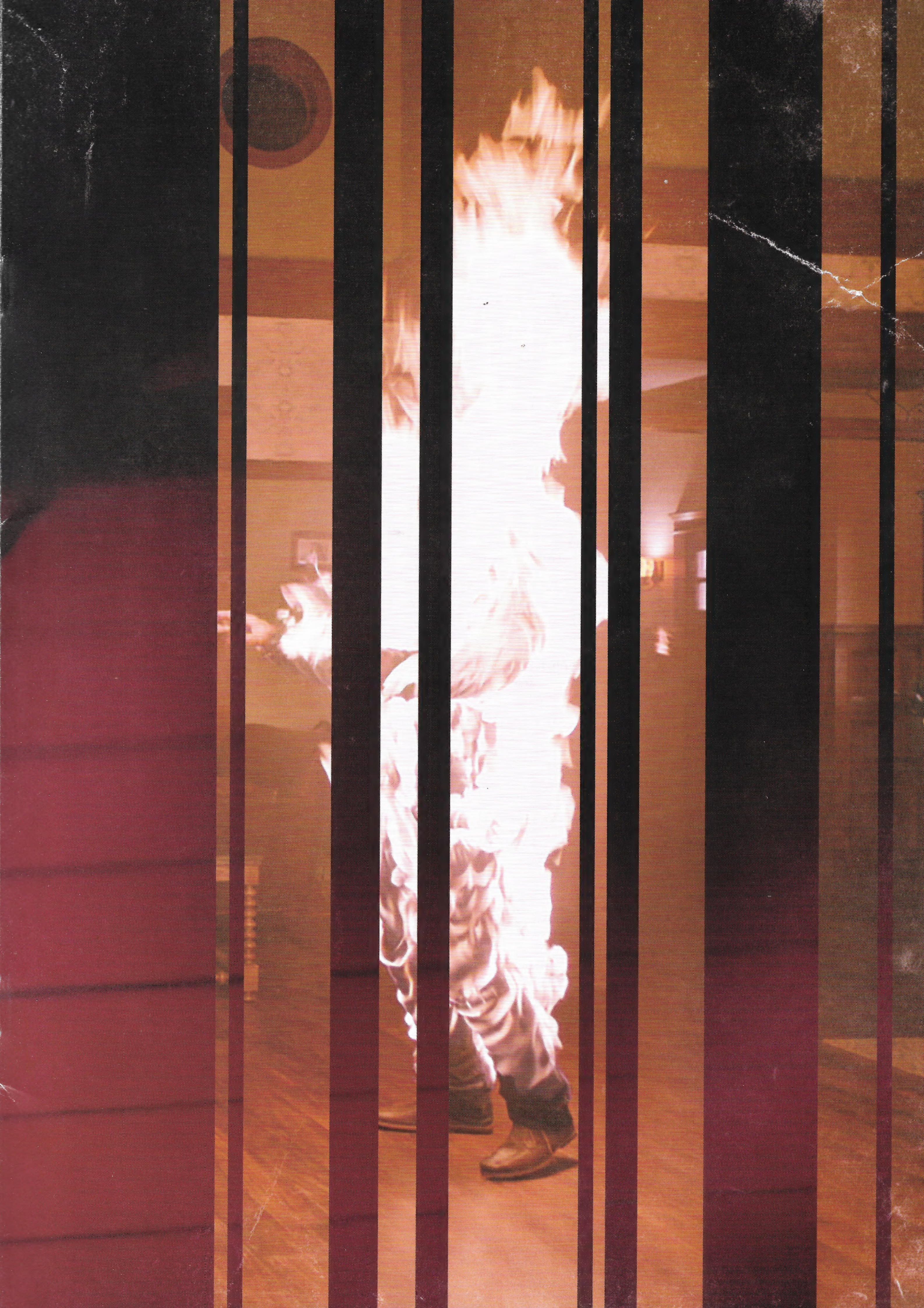
『ヘレディタリー』を観て、一番トラウマなキャラクターとしてアニーを挙げる人は多いだろう。数々の恐ろしい異形の表情と声（悲鳴、嗚咽）。正気を失い、最後には人間を超越した怪物的な行動を見せる彼女（屋根裏部屋の扉にヘッドバンギングし、静かに壁を這う）こそ、本作で最もホラーなキャラクターだ。演じたトニ・コレットはアメリカのメディアの間で「アカデミー賞ノミネート確実」の呼び声も高く、もし実現すれば彼女にとって『シックス・センス』での助演女優賞ノミネート以来となる（あれも幽霊映画＝ホラーだった）。

「ヘレディタリー」への継承」

今年3月のテキサス、SXSW映画祭の満席の深夜上映で筆者が本作を鑑賞した時、『ローズマリーの赤ちゃん』や『悪魔の追跡』、『キャリー』などを思い出した。これら以外にインスピレーションを受けた作品として、監督が上映後のQ&Aで挙げたのはケン・ローチ監督の諸作、マイク・リー監督の『秘密と嘘』と『人生は、時々晴れ』（アスターいわく「多分僕の一番好きな監督」）、トッド・フィールド監督『イン・ザ・ベッドルーム』、イングマール・ベルイマン『叫びとささやき』、ニコラス・ローグ監督『赤い影』、アン・リー監督『アイス・ストーム』、『普通の人々』、さらに日本の古典ホラー『雨月物語』や『鬼婆』など。このセンス、ただのシネフィルではない。アスター監督は、Time Outのインタビューで「撮影中、クルーに言ったんだ。この映画はホラーではなく、恐怖に震える悪夢的な家族の悲劇の物語だって」と語っているが、それが本作がじっくりと丁寧に描かれたドラマ性の高いホラーである理由だろう。

隠された謎を踏まえて、
ぜひ映画館でもう一度
『ヘレディタリー／継承』を
ご鑑賞ください。







CAST

Annie Graham	TONI COLLETTE
Steven Graham	GABRIEL BYRNE
Peter Graham	ALEX WOLFF
Charlie Graham	MILLY SHAPIRO
Joan	ANN DOWD

CREW

Director / Writer	ARI ASTER
Producer	KEVIN FRAKES
	LARS KNUDSEN
	BUDDY PATRICK
Director of Photography	PAWEL POGORZELSKI
Editor	JENNIFER LAME
	LUCIAN JOHNSTON
Composer	COLIN STETSON
Production Designer	GRACE YUN
Set Decorator	BRIAN LIVES
Costume Designer	OLGA MILL
Art Director	RICHARD OLSON
Miniature and Prosthetics	STEVE NEWBURN
Visual Effects Supervisor	ERAN DINUR
Compositing Supervisor	MANI TRUMP
Script Supervisor	BRIANNA WALL
	LEX HOGAN
Hair	ROCKETS "LORA" LAING
Makeup	GREG MOON
Location Manager	ANDREW HODGE
Casting Director	JESSICA KELLY
Post-Production Supervisor	JEFFREY PENMAN

キャスト

アニー・グラハム	トニ・コレット
スティーヴン・グラハム	ガブリエル・バーン
ピーター・グラハム	アレックス・ウォルフ
チャーリー・グラハム	ミリー・シャピロ
ジョーン	アン・ダウド

スタッフ

監督 / 脚本	アリ・アスター
プロデューサー	ケビン・フレイクス
	ラース・クヌードセン
	バディ・パトリック
撮影	パヴェウ・ポゴジェルスキ
編集	ジェニファー・レイム
	ルシアン・ジョンストン
音楽	コリン・ステットソン
美術	グレイス・ユン
セット・デコレーター	ブライアン・ライヴス
衣装デザイン	オルガ・ミル
アート・ディレクター	リチャード・オルソン
ミニチュア模型・特殊メイク	スティーブ・ニューバーン
視覚効果スーパーバイザー	エラン・ディアヌ
音楽スーパーバイザー	マニ・トランプ
脚本スーパーバイザー	ブレアナ・ウォール
	レックス・ホーガン
ヘアー	ロケッツ・"ローラ"・ライング
メイク	グレッグ・ムーン
ロケーション・マネージャー	アンドリュー・ホッジ
キャスティング・ディレクター	ジェシカ・ケリー
ポストプロダクション・スーパーバイザー	ジェフリー・ペンマン

原題：HEREDITARY｜2018年｜アメリカ映画｜ビスタサイズ｜上映時間127分｜翻訳：松浦美奈

PG12 映倫

提供：ファントム・フィルム／カルチュア・パブリッシャーズ　配給：ファントム・フィルム

発行日：2018年11月30日　編集・発行：ファントム・フィルム　TEL：03-6276-4035　〒151-0053 渋谷区代々木1-11-2 代々木コミュニティビル３F
デザイン：(株)ノーフューチャー　印刷：アベ印刷
定価：648円＋税　※無断転載を禁ず

HEREDITARY